

# 研 究 ノ ー ト

※公募により岡崎大学懇話会所属の研究者から寄せられた研究成果を掲載いたします。

## 【研究ノート】

# 地域連携型キャリア教育の実践と評価に関する一事例

愛知学泉大学 木田 竜太郎

## 要 旨

本研究は、2015年度より2カ年にわたって取り組まれた「地域志向教育」の実践と評価に関する成果の一部であり、大学周辺企業の社長・自治体の首長をゲストスピーカーとして招聘するPBL科目「プレジデント・セミナー」の実践例と、そのような活動（成果）の評価指標の具体化に関する取り組み（学修ベンチマーク・地域志向「学習ルーブリック」の検討）の事例を示すものである。大学の地域連携・社会貢献活動への期待、キャリア教育の必要性が高まる中で、正課としての地域連携型教育の実質化と体系化のさらなる進展が求められている。

### 1. 研究の概要

地域連携・社会貢献活動が、「研究」「教育」と並ぶ大学の「第3の使命」に掲げられて久しい。しかし、地域における活動を通じた教育による“学生の成長”をいかに把握するか、またその成長の進度と深度をいかに評価するかについては、各方面でなお試行錯誤の段階にある。

本研究は、筆者が2015年度より2カ年にわたって取り組んだ「地域志向教育」の実践と評価に関する成果の一部である。当時、筆者は赴任校が採択された大学COC事業（文部科学省「知(地)の拠点整備事業」）の専従研究員として、「地域志向教育」の実践と評価に関する研究に従事し、また学部の兼任講師として、同校が「プロジェクト科目」の名称で実施するPBL科目（プロジェクト・ベースド・ラーニング：課題解決型学習）を担当した。同校の所在地域においては、産業振興と人口流出対策という行政課題が存在し、若年層の定住促進、なかんずく地元学生の卒業後の雇用確保が喫緊の課題として存在した。

一方、大学におけるキャリア支援教育は、正課としての歴史が極めて浅く、その適切な在り方や、取り組みの方策等に関する研究は、理論と実践の双方において、なお不十分といわざるを得ない。そこで筆者は2016年度の1カ年、同年度前期の担当科目を「プレジデント・セミナー」と名付け、同校所在地域の広域自治体（都道府県レベル）の協力を得て、同科目を広域振興局の寄附講座として開講させた。その本旨は、地域におけるトップ・キーパーソン間のネットワーク形成を通じた「地域連携型キャリア教育」の実現を目指し、大学卒業後に地元で就職し、地域産業を支える若者を増加させることによって、当該地域全体の活性化に資することにある。

さらに、学部（学士課程）教育の中で地域連携・社会貢献活動がいかに位置づけられ、かつその特徴を踏まえた評価指標がいかに設定されるべきか。すなわち、受動的・客体的学びから能動的・主体的な学びへと、高等教育の「質的転換」がいわれる中で、学生のパフォーマンスを可視化する評価指標として注目されるのがルーブリック（rubric）である。本件事例においては、日本におけるルーブリックを用いた教育評価の先行事例に学びつつ、AAC&U（アメリカ大学・カレッジ協会）のバリュー・ルーブリックについて改めて検討を加え、同校及び同科目の「地域志向教育」における教育評価の指標と手法の具体化について試行した。

以下、前半ではPBL科目「プレジデント・セミナー」の受講学生による成果発表について、後半ではそのような活動（成果）の評価指標の具体化について、それぞれ紹介したい。

## 2. PBL 科目「プレジデント・セミナー」の概要と成果

この授業では、大学の所在地域を拠点とする自治体及び企業の長（トップ・キーパーソン）の組織化を企図し、大学をハブとした、本件課題をテーマとする地元有志・有識者間の持続的かつ効果的なネットワーク形成を模索した。具体的には、同校カリキュラム上の現場実践教育科目「プロジェクト科目（地域）」の開講科目として実施された「プレジデント・セミナー」へのゲスト講師招聘を契機として、本件課題に関する調査・ヒアリングを行い、意欲的・協力的なトップ・キーパーソンによる計5回の講演会を、自治体の寄附講座・大学の公開講座として、一般にも広く開放される形で開催した。

さらには、学士課程教育の正課として提供されるにふさわしい「地域連携型キャリア教育」の在り方について、本件課題に関する専門学会への参加、先駆的な取り組みが認められる地域・大学等への訪問調査・ヒアリング等を実施し、本研究への適応・援用が可能と思われる先行研究・実践事例の整理・調査・分析を行い、一部の成果は「プレジデント・セミナー」を通じた研究・教育活動へと還元された。

なおこの授業は、同校開催の「プロジェクト科目（地域）合同成果発表会」において「優秀プロジェクト賞」を受賞した。その受講学生（4名）による成果発表の概要を以下に示す。

### （1）クラスの概要

本学が立地する地域には、国内外で高い評価を受ける魅力的な企業、個性的な取り組みで知られる自治体などが、数多く存在しています。

このクラスでは、そんな企業の社長さんや自治体の首長さんをお招きして、豊富な経験に基づく貴重なお話を伺いました。そのゲスト講義が「プレジデント・セミナー」です。

私たちは、セミナー開催に向けての準備、当日の司会・運営などを、クラスの4人で分担・協力し合って、「学生の、学生による、学生のための」セミナーの実現を目指しました。

### （2）課題設定

話し合いの中で、私たち4人は、共通する一つの悩みを抱えていることに気づきました。それは、〈積極的に「人と話す」「人前に出る」ことに大きな苦手意識をもっている〉ことです。

私たちは、課外のサークル活動ではなく、正規の授業（＝逃げられない！）で自分自身を見つめ直し、弱点を克服しようと、思い切って履修登録しました。

普段、話を聞くような機会が無い各界のトップの方々と、親しくかつ緊張感をもって向き合い、トップのトップたるゆえんを実感をもって吸収することにより、「社会人になる」ということ、自分自身の将来のキャリアについて真剣に考えようと思いました。

### （3）仮説の設定

各界のトップ、プレジデントの方々に、どのような話を聞きたいか。このクラスでは、一つの仮説を立てました。

それは、〈社長や首長といった、その人の「ブランド」は、しっかりとした「個人」の上に築かれる〉というものです。

社長や首長といった「肩書き」は、その人そのものではありません。しかし、トップとして、多くの人々の運命を左右するような立場に立つ人は、よほどしっかりとした「個人」をもっているのではないかと。それが、私たちの仮説です。

#### (4) テーマの設定

そのような仮説をもとに、今回のセミナーでは、ゲストの方に、一度私たち学生が目線までおりて来ていただき、「かつての自分」に語りかけるようなイメージで、将来への期待と不安を抱く私たちへのメッセージをいただきたいと考えました。

テーマは、「二十歳（ハタチ）のころ～私は、いかにして私となったか～」。

広域振興局のみなさまのご支援のもと、毎回、セミナーの事前相談を兼ねた企業・役所訪問を実施し、5人のゲストをお招きすることができました。

#### 【第1回セミナー】2016年4月27日(水) 13:00～14:30

- ・講師：A先生（広域振興局 前局長）自治体／行政官
- ・ミーティング（調査・ヒアリング含）4月20日(水) 於 学内
- ・感想：「A先生の大学時代は、学生によるデモ活動で授業が中止になるなど、現在では起こり得ないようなことを体験されており、今と昔の学生の違いなどを知ることができました。」

#### 【第2回セミナー】2016年5月28日(土) 10:30～12:00

- ・講師：B先生（市長）自治体／政治家 ※「市のまちづくり大学生会議」として開催。
- ・ミーティング（調査・ヒアリング含）5月18日(水) 於 市役所
- ・感想：「B先生は、家庭の事情で大変な苦学をされて、子どものころのお弁当は紅生姜のみ、中卒で就職、教師を目指して定時制高校を出られたことなど、とても心に残るお話が聞けました。」

#### 【第3回セミナー】2016年6月8日(水) 13:00～14:30

- ・講師：C先生（有限会社C工業 代表取締役社長）切削加工業
- ・ミーティング（調査・ヒアリング含）6月1日(水) 於 (有)C工業社内
- ・感想：「C先生は、義理のお父さんが創業された会社を、旦那様を亡くされた直後、大変な時期に引き継がれ、「未来のために何ができるか」といったお話が印象に残りました。」

#### 【第4回セミナー】2016年6月22日(水) 13:00～14:30

- ・講師：D先生（株式会社D 代表取締役社長）葬祭業
- ・ミーティング（調査・ヒアリング含）6月15日(水) 於 (株)D社内
- ・感想：「D先生は高卒で就職、しかし内定の取り消しにあい、日雇いバイトを6年も続け、営業で出入りしていた会社に「社長に」と見込まれるなど、大変なサクセスストーリーに魅了されました。」

#### 【第5回セミナー】2016年7月6日(水) 13:00～14:30

- ・講師：E先生（E株式会社 代表取締役社長）化粧品製造業 ※東証一部上場企業
- ・ミーティング（調査・ヒアリング含）6月29日(水) 於 E(株)社内
- ・感想：「E先生は、大学時代に遊び過ぎたため、就活でとても苦戦されたとのこと、見知らぬ土地で一人で営業を続け、「簡単・単純・楽な仕事」にやりがいは無いというお話が印象的でした。」

#### (5) 課題

この「プレジデント・セミナー」は、広域振興局の寄附講座、大学の公開講座として開催されました。

司会・運営だけでなく、聴講者ともなる履修者が私たち4人だけということもあり、第2回からはポスターを作ったり、友だちに声をかけたりと努力したつもりですが、同じ時間に就職やゼミのガイダンスが組まれていたりして、一番話を聞いてほしい学生の聴講者が、ほとんどいなかったことは非常に残念で、ゲストの方に申し訳なく思いました。

しかし、一番の課題は、私たち自身の「姿勢」にあったと反省しています。

セミナー当日のホストとしての最低限の課題として、木田先生に指導された「司会」と「質問」の二つをしっかりとやるよう、心がけていたつもりでした。

「司会」については、家での練習では上手くいくと思っていたものが、本番ではそうもいかず、まだまだ準備不足でした。

そして「質問」については、どうしても気後れしてしまい、企業訪問の時も、本番の時も、一度も質問しないままに、流れに任せてしまうようなこともありました。せっかく、貴重な時間を割いて、色々な話を聞かせてくれた方々に対して、これは一番失礼なこと、深く反省しています。

コミュニケーションを取ろうとする積極的な「姿勢」が、まだまだ足りなかったと思います。

#### (6) 仮説の検証

- ・「その場の状況にとらわれず、夢や目標をもつことが大切。」(A先生)
- ・「真実は一つだが考え方は無限にある。自分の考えに自信をもとう。」(B先生)
- ・「人は死ぬまで成長。力は低下しても、年を重ねれば人とのつながりは増えていく。」(C先生)
- ・「挑戦しなければ失敗はないが、失敗からの成長を得ることはできない。」(D先生)
- ・「初めてやる仕事に簡単も難しいもない。初めてやる者が一番仕事を覚えて上手くやる。」(E先生)

5人のプレジデントの方々、仮説の通り、「ブランド」の土台となる〈しっかりとした「個人」〉をお持ちであることが分かって、先生方の「姿勢」と「経験」に、少しでも学んで、今後活かしたいと改めて思いました。

#### (7) 成果

この授業を通じて、少なくとも、私たち4人は、二つの成果を得ました。

一つは、しっかりと「準備」することの重要性を改めて痛感したこと、もう一つは、何事によらず「やってみる」「挑戦」しようとする「姿勢」の大切さを強く実感したことです。

例えば司会について、回を重ねた後半は台本を全く見ないようにするなど、求められる以上の「挑戦」をしました。質問についても失敗や恥を恐れず、とにかく口を開いてコミュニケーションを試みる「姿勢」を見せられるようになりました。

失敗を恐れて「何もしない」のは、プラスマイナスゼロどころか、失敗によって成長する機会すら失ってしまうという意味で、明らかにマイナスなのだということに、今、気づけたことが成果なのだと感じています。

### 3. PBL科目「プレジデント・セミナー」の総括

本件課題に関する共通の危機感・問題意識を軸として、地域におけるトップ・キーパーソン

間の持続的・効果的なネットワークが、地域行政の支援・後援のもと、大学をハブとして形成・構築されることによって、地域の地場産業を支える“地元の若者”の定着と定住、なかんずく地域の活性化に大きく資する効果を生むことが期待される。

大学と地域行政・企業との良好な関係性を基盤とした研究・教育活動は、それぞれの主体のニーズに即した様々な取り組みへの波及効果を促進する。大学をハブとした“地元の有力企業”によるキャリア支援教育・ネットワークの形成は、地域を対象とする既存の正課科目（注：同校における「地域インターンシップ」「プロジェクト科目（地域）」「地域ボランティア演習」など）の教育効果をより高めることはもちろん、科目間連携や各専門科目との新たな連携等、大学におけるキャリア支援教育全体のさらなる充実・向上に大きく資することが見込まれる。

地域のニーズに照らした企業活動・業態を反映した「地域連携型キャリア教育」の展開は、学生の地域志向・地元への就職志向を刺激し、そのような学生の受け皿となる「就業マッチングシステム」の構築等、若年層の地元定着・定住促進に資する多種多様な活動への発展を不可避なものとするであろう。このような経験を踏まえた、今後の地域連携事業への波及効果等、さらなる進展が期待される。

#### 4. 「地域連携型」教育における評価の指標（rubric）

筆者は当該大学において、同大学の学士課程教育の再検討作業が進められる中で、COC 事業のアウトカムでもある「地域」人材の育成を踏まえた“全学における教育目標”の明文化作業に従事した。

すなわち、再策定が進められた学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）の前文において、「本学の各学位プログラムの課程を修めた上で、人間関係・社会組織・地域社会など、社会のさまざまな場面で「共生」を創造できる「共生人材」を育成する」ことが明記され、併せて、その具体的指標を示す「学修ベンチマーク」が提示された。これは本研究の成果を母体として策定されたものであり、その原案を【資料1】として示す。

【資料1】「学修ベンチマーク」（原案）

大項目	大項目の説明	中項目	中項目の説明	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
自己対峙力	常に自己を相対化するための自律性を持ち、かつ柔軟に自己革新を続けるための知的好奇心、さらに自己表現力をもつことができる。	自律性	自分の行動には責任が伴うことを自覚し、自らを律しつつ設定した目標の実現に向けて積極的に取り組み、最後までやりとげることができる。	自分の行動には責任が伴うことを理解し、自分の目標の実現に向けて積極的に取り組み、やり遂げられるまで継続することができる。	自らの責任を自覚しつつ設定した目標の実現に向けて継続的に取り組むことができる。	与えられた課題や自分で設定した目標について、自分なりにやり遂げる方法を見つけて取り組むことができる。	与えられた課題の実現に向けて、自分の責任を理解して取り組むことができる。



		知的好奇心	新しい知識や技能、社会におけるさまざまな現象や問題を学ぶことに、自ら関心や意欲をもつことができる。	修得した知識・技能を社会でどのように活用できるかについて、主体的に関心や意欲を持つことができる。	修得した知識・技能と社会の現象を関連づけて、新たな疑問や関心について積極的に学ぶ意欲を持つことができる。	知りえた内容に刺激を受けて、新たな疑問や関心を持つことができる。	社会の現象や授業で学ぶことに関心を持つことができる。
		自己表現力	言語的及び非言語的な表現方法を工夫しながら、自分の思いや考えをわかりやすく効果的に表すことができる。	言語的・非言語的な表現方法を活用して自分の思いや考えをわかりやすく表現したり、相手からの質問や意見に対して臨機応変に応答することができる。	言語的・非言語的な表現方法を活用して、内容の構成を工夫しながら自分の思いや考えをわかりやすく表現することができる。	言語的な表現だけでなく、非言語的な表現方法も活用して、時間などの決められた条件の中で、自分の思いや考えを表現することができる。	時間などの決められた条件の中で、自分の思いや考えを表現することができる。
汎用的知力 (問題解決力)	自ら学ぶ学位プログラムの基礎となる教養及び専門的知識・技能を修得し、かつそれらを応用する力(情報収集・活用力、問題発見力、論理的思考・判断力、計画・実行力)の総合化によって、「共生」をめ	情報収集・活用力	必要な情報や信頼できる情報をさまざまな方法を使って集め、解決の視点から必要な情報を取捨選択し、整理・保存しながら活用することができる。	多様な情報源から、必要かつ信頼できる情報を的確に選択して収集し、問題発見や解決のアイデアを構想することに活用することができる。	多様な情報源から、必要かつ信頼できる情報を収集して、要点を整理・保存しながら、自分の主張やアイデアを裏づけることができる。	多様な情報源から、必要かつ信頼できる情報を集め、要点を整理してから保存することができる。	多様な情報源から必要な情報を集めることができる。
		問題発見力	現状から何が問題であるかを発見し、その解決	今後生じる可能性のある未知なる問題を予測	現状を確認し、今後生じうる問題を積極的に見	現状を確認し、生じている問題に気づき、解決の	現状にある問題に気づくことができる。

	ぐる諸問題を解決することができる。		に向けた課題を考えることができる。	し、これまでの問題解決における手法を参考にして、解決に向けた課題を提示することができる。	つけ、解決のための課題を提示することができる。	ための課題を考えることができる。	
		論理的思考・判断力	偏った判断をすることなく、論理的に考えることができる。	論証に基づいて論理的に導き出した意見や結論についてさまざまな視点から検証を行うことができる。	論証に基づいて論理的な意見や結論を導き出すことができる。	客観的な事実から、問題の原因について論理的に仮説を立てることができる。	他者の意見や物事を客観的な視点で捉え、事実と意見を区別することができる。
		計画・実行力	問題解決に向けて見通しのある計画を立て、検証及び修正しながら実行することができる。	自ら立てた計画に能動的に取り組み、その結果をふりかえって、良かった点を活かし、悪かった点を改善して次の計画に活かして実行することができる。	見通しをもった計画を自ら立てて取り組み、計画の進行状況や課題の達成状況を確認し、必要に応じて修正しながら実行することができる。	自ら計画を立てて課題に取り組み、期限に間に合うように実行することができる。	計画にもとづいて課題に取り組むことができる。
現場実践力	常に他者の立場に立って物事を考える共感的態度をもち、かつ柔軟な対話を通じて他者と協働するための意見交換・	共感的態度	他者と接するときに、感覚や感性を働かせ、相手の立場に立って考え、共感を示すことができる。	相手の感情、思考、行動を理解し、共感を示すとともに、その人が必要としていることに配慮した行動を取ることができる。	相手の感情、思考、行動を理解し、共感を示すことができる。	相手の感情、思考、行動を理解するために、その人の立場に立って考えることができる。	相手の話を聞くときに、目線を合わせるなど、向き合う姿勢をとることができる。



	調整力、さらに社会的責任を自覚して行動しようとする社会的能動性によって、「共生」社会の実現に貢献することができる。	意見交換・調整力	他者の発言を傾聴して、その内容の要点をとらえ、自分の疑問や主張をまとめて、他者と意見の交換や調整をすることができる。	自分の意見や考えと他者の主張を調整して互いに納得できる結論を導き出した上で、新たな問題や発展的な課題を提起することができる。	他者の主張を理解して、自分の意見や考えと他者の意見を調整して、互いに納得できる結論を得ることができる。	他者の発言の論点を理解して、それに対する自分の意見を示すことができる。	議論や話し合いなどにおいて、自分の意見を示すことができる。
	社会的能動性	自分の役割や責任を理解し、他者との積極的な協働や交流を通して、社会のために行動することができる。	社会が求めていることを理解し、他者との協働のもと、社会のために自ら活動を組織して行動することができる。	社会が求めていることに関心を示し、社会のために他者と協働しながら行動することができる。	集団の中で、他のメンバーと協働しながら行動することができる。	集団の中で、自分の果たすべき役割や責任を考えながら行動することができる。	

学長室より最終案として公開され、全学での検討・更新段階に入った「学修ベンチマーク」では、「共生」を創造できる力（社会的価値創造力）を獲得するための3つの能力（大項目：①自己対峙力、②汎用的知力、③現場実践力）について、上記をもとに10の細目（中項目：①自省・向上・自律、②調査・発問・分析・企画、③共感・対話・実行）が設定された。

これらの指針を踏まえて、当該大学の目指す「地域志向教育」の段階別到達点を示す「学習ルーブリック」について改めて検討を加え、地域志向科目の基盤科目である全学必修科目「地域入門」の授業内における試行につなげた。その原案を【資料2】として示す。なお効果検証については、COC事業「自己点検・評価」内にて報告された。

#### 【資料2】地域志向「学習ルーブリック」

##### (1) 「地域志向」自己評価表

評価ポイントとレベル	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
<b>I. 関心・意欲</b> 地域に関心をもち、地域課題の発見に努める意欲をもつことができる。	地域についての知識に積極的な関心をもち、地域課題を自らの課題として発見に努める意欲をもつことができる。	地域についての知識に関心をもち、地域課題の発見に努める意欲をもつことができる。	地域について与えられた知識に関心をもちることができる。	自分の身近な地域について、何らかの関心をもちることができる。

<b>II. 認識・理解</b> 地域とは何かを認識し、地域課題の基本について理解することができる。	地域についての知識を積極的に吸収し、地域課題を自らの課題として理解することができる。	地域についての知識を幅広く吸収し、地域課題とは何かを理解することができる。	地域について与えられた知識に基づき、地域とは何かを認識することができる。	自分の身近な地域について、何らかの認識をもつことができる。
<b>III. 問題意識・思考</b> 地域課題への問題意識をもち、課題解決のための思考へと発展させることができる。	地域についての知識を積極的に検証し、地域課題を自らの課題として解決するための思考へと発展させることができる。	地域についての知識を幅広く検証し、地域課題を解決するための思考へと発展させることができる。	地域について与えられた知識を、何らかの問題意識に基づいて検証することができる。	自分の身近な地域について、何らかの問題意識をもつことができる。
<b>IV. 準備・計画</b> 地域における諸活動を実施するにあたっての準備・計画を立てることができる。	地域における諸活動を実施するにあたって、必要な情報を適切に収集・整理し、積極的な計画を立てることができる。	地域における諸活動を実施するにあたって、必要な情報を収集・整理し、計画を立てることができる。	地域について与えられた情報を、必要に応じて整理することができる。	自分の身近な地域について、何らかの情報を収集することができる。

## (2) 「地域入門」ワークシートのルーブリック

評価ポイントとレベル	レベル3	レベル2	レベル1
<b>I. 参加</b> 授業への参加が分かる記述が 出来ている。	3つ以上の項目で、何らかの記述が出来ている。 (1点)	2つ以上の項目で、何らかの記述が出来ている。 (1点)	1つ以上の項目で、何らかの記述が出来ている。 (1点)
<b>II. 理解</b> 授業の内容を正確に理解した 記述が出来ている。	3つ以上の項目で、授業で得た知識・情報に基づく記述が出来ている。 (1点)	2つ以上の項目で、授業で得た知識・情報に基づく記述が出来ている。 (1点)	1つ以上の項目で、授業で得た知識・情報に基づく記述が出来ている。 (1点)
<b>III. 思考</b> 授業の内容を正確に理解した 上で、その内容を検証・発展 させる記述が出来ている。	全ての項目で、質・量ともに十分な記述が出来ている。 (1点)	「*」を含む2つ以上の項目で、授業で得た知識・情報を検証・発展させる記述が出来ている。 (1点)	「*」の項目で、授業で得た知識・情報を検証・発展させる記述が出来ている。 (1点)

[注]

1. 「\*」(アスタリスク) は、その授業で「最も重要な設問の項目」であることを意味する。
2. 授業内容を「検証・発展させる記述」とは、授業の内容を正確に理解した上で、その内容を、もともと自分もっている知識や情報、自分に身近な事例や他の授業から得られたこと等と照らし合わせて、改めて「思考」することを促すものである。これによって、「当事者性をもって、地域志向を自らの学びに組み込む方法を考える」ことが重視される。
3. ワークシートの提出が確認出来れば1点、9つ全てのマスが埋まれば9点、計10点満点で評価する。

(3) 「地域入門」 学期末課題（レポート）のルーブリック

評価ポイントとレベル	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
<b>I. 授業で得られた知見の活用</b>	授業で得られた知見が、課題と対応する形で的確に活用されている。	授業で得られた知見が、課題と対応する形で部分的に活用されている。	授業で得られた知見が示されているが、課題との関係性に乏しい。	授業で得られた知見が示されていない。
<b>II. 課題に対する記述</b>	課題に対応した記述が、質・量ともに十分な形でなされている。	課題に対応した記述がなされているが、質・量のいずれかが十分でない。	課題に対応した記述がなされているが、質・量ともに十分でない。	課題と無関係の記述がなされている。
<b>III. 論理の構成</b>	結論に至るプロセスを明確にたどることができ、論理の矛盾が見られない。	結論に至るプロセスをたどることができ、やや構成に難がある。	一定の結論が示されているが、そこに至るプロセスをたどることができない。	結論が示されておらず、何を言いたいのかわからない。
<b>IV. 文章の体裁</b> ①段落が適切につくられている。 ②句読点が適切につけられている。 ③主部と述部の対応にねじれがない。 ④文体が統一されている。	文章の体裁が適切に整えられ、違和感なく読むことができる。	文章の体裁 ①～④が3つ以上、整えられている。	文章の体裁 ①～④が2つ以上、整えられている。	文章の体裁が整わず、読み手への配慮が見られない。
<b>V. 表現の推敲</b> ①同じ言葉の繰り返しや多用がない。 ②誤字・脱字がない。 ③仮名遣い・送り仮名の誤りがない。 ④専門用語を正しく用いている。	表現の推敲が丁寧になされ、誤りが見られない。	表現の推敲 ①～④が3つ以上、整えられている。	表現の推敲 ①～④が2つ以上、整えられている。	誤字・脱字・表現に誤りが多く、推敲がなされていない。

5. 「地域連携型」教育における評価の課題

「共生人材」（地域の人々と共に生かし合う力＝共生力＝社会的価値創造力を備えた人材）の育成は、COC 事業における地域連携・社会貢献活動のみならず、大学の学士課程教育における全学規模での“共通の教育目標”であり、本研究はその基盤整備の一環として試行された。

「共生人材」の育成という共通の教育目標がディプロマ・ポリシーへの明文化を経て、全学規模で改めて認識された意義は大きい。「学修ベンチマーク」の指針に基づき、「地域入門」内で試行された地域志向「学習ルーブリック」では、教育目標の共有化による学習意欲の向上に

確かな成果が認められ、この種の「地域連携型」教育における評価システムの確立という課題に大きな示唆を得たものといえる。

ルーブリックは、数ある教育評価手法の一つに過ぎないが、いわゆるAL（アクティブ・ラーニング）やPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）のみならず、従来型の座学においても極めて有効な評価ツールとなり得る。一例として、教職課程等、課程内で複数の同種授業が展開される中での評価基準の統一、具体例として、資料2の（3）で試行された、従来、各教員の主観に任される感の強かったレポート評価の組織化等が挙げられる。教育成果の可視化、成績評価の厳格化、学士課程教育の質保証という社会的要請の中で、その一環としての「地域連携型」教育の実質化と体系化のさらなる進展が期待される。

## 謝 辞

本稿は、大学における「地域連携型キャリア教育」導入の一事例として、文中の人物・団体等を敢えて匿名で記したが、本件課題（特に「プレジデント・セミナー」の実施）については、講師、学生、広域振興局はじめ、多くの方の協力を得ている。ここに姓名を記させていただき、改めて感謝の意を表したい。（敬称略、順不同）

服部 絵莉香 辻川 陽基 中井 匠 松尾 一樹 小川 嘉幸 住山 貢  
高津 幸介 久井 愛 田中 準一 山本 正 西田 裕子 上野 雄一郎  
小田 博英